

瀕死の日記

二〇一二年十月（死に神特集）

神遊

十月一日（月）

慈悲深く、愛らしい、少年のような死に神。

「おいでよ」

と、こんな私を誘ってくれる。

もうちよつと待つてね。

十月二日（火）

しまじろうについて。

子供たちは、しまじろうに、おのおの自分の中のしまじろう像を投影する。

「しまじろう！」「しまじろう！」「しまじろう！」

当のしまじろうの笑顔はどこまでも空っぽだ。

そんな、しまじろうのようなものに私は憧れる。

十月三日（水）

死に神とは、生から死への移行を助ける、産婆のような存在かもしれない。我々はいつか、死の世界に産まれ出て、尻を叩かれ、おぎゃー、と泣くのだ。立派に死にましたよ、とか言われて。もつと、もつと花びらを。

十月四日（木）

死に神が鍼灸院でベッドで横になり、お灸をすえている。

人を死にいざなうのは相当疲れるらしい。

もぐさの香りが漂う。

隣のベッドでは、もぐさの煙にまかれて、お爺さんが息絶えようとしている。

死に神は、やれやれ、また仕事だ、といった顔だ。

十月五日（金）

人の手は長い指が五本もあつて、とても複雑な形をしている。

そんな手と手を絡ませて、握り合う。

そこに嘘などあるはずがない。

詐欺師は自分の感情を欺くのだ。

それは胸が苦しいことだ。

十月六日（土）

ソラカラちゃん

ああ、ソラカラちゃん

ソラカラちゃん

そんなに身を乗り出したら

真つ赤なトマトになっちゃうよ

十月七日（日）

死に神の遊ぶ岬。

死に神はとんびの姿になり、空をくるくる回つて目を回す。

ぴーひよろひよろひよろろ。

そして十分遊び疲れたら、山頂に降りて元の姿に戻り、真面目に仕事へ戻る。
錆びた大鎌を、よいしょ、とかついで。

十月八日（月）

パワースポット。

地上のツボに、死に神は立っている。

死の一步手前に快樂はあるからだ。

快樂の一線を越えると、それは死になるからだ。

ああ、極樂。

十月九日（火）

慈愛とは、死を内包した生の抱擁だ。
死に神の愛。

十月十日（水）

死に神と死に神が抱擁し、口づけを交わす。

その時、二人は悲しいままでに解放される。

もう知り尽くしている。

怖くはない。

十月十一日（木）

日常に疲れた死に神が上昇気流に乗る。

上へ、ひたすら上へ。

眼下の人は点になり、色になり、やがて何も見えなくなる。

雲の上はすがすがしくて、眩しくて、静かで、とても寂しい。
死に神なのに、命が恋しくなる。

十月十二日（金）

死に神の親は死に神ではない。

生ある我々だ。

生ある者は必ず死ぬ、という事実から目を背け、死を遺棄した我々の影だ。
成長した水子だ。

十月十三日（土）

くまモンの大きなぬいぐるみを買う。

金に汚れたひこにゃんと違って、こちらは純粹に愛らしい。

くまもとだから「くまモン」という安直なネーミングも大好きだ。

悲しい私はくまモンを見つめる。

十月十四日（日）

外で煙草を吸っていたら、上から人が落ちてきて、地面に衝突すると同時に血しぶきや肉片が飛び散り、だなんて、ほんと迷惑な奴だよなあ。

十月十五日（月）

私は必死で坂道を登っていた。

すると、私の後ろから女が登ってきた。

女は幼児一人分ほどもある巨大な買い物袋を左手に持ち、涼しい顔をして右手の携帯に夢中になっていた。

私はそんな女にあつきり追い抜かれた。

十月十六日（火）

死に神が立つ場所に今日も立ってみた。

日に日に何かが怖くなる。

死ぬのが怖いのではない。

うまく言葉で言えないが、強いて言うなら、
自分が自分から遊離していくのが怖いのだ。

十月十七日（水）

昨夜は眠れなかったので、ブルックナーの交響曲を寢床で聴いた。

ブルックナーは退屈なので、子守歌にうつってつけなのだ。

ブルックナーはお薦めだ。

結局、一睡もできなかった。

十月十八日（木）

大きくて低くて濁った色の月は不気味だ。

それが怨念のように赤かったらなお不気味だ。

まるで意識にえぐり込んできそう。

逆に遠くて小さくて澄んだ色だと、我々臆病者はみな安心し、余裕かましたり、風流ぶつたり、ロマンチックな気分になったりする。

まったくもつて、サルだ。

十月十九日（金）

鼻をほじると、鼻くその香りが鼻中に広がる

ケツを拭いて紙に血がついていても、まだうんこがついていると、絶望する
あまりに背が高いと、ちんぽの位置もあまりに高いので、小便器で丸見えだ
チンカス野郎、とマンカスさんが言った。

キジフ・ゲルーシ

十月二十日（土）

世間では死に神は嫌われ者の極致なので、死に神はいつだってとても悲しく寂しい思いをしている。

だから、自ら命を絶とうとする人の心の痛み、絶望が誰よりもよく分かる。とても、とても、とても心が優しいのだ。

天使なんかの比じゃないね。

十月二十一日（日）

こんにち、死後の世界を信じている人はごく少数だ。

大多数の人は、死後の世界なんか無い、と考える。

そう、

生きている人たちの記憶に、生きていた頃の死者の思い出があるだけなのだ。

それは死後の世界よりも暖かく、ありがたい。

十月二十二日（月）

あまりに異常な死を除いて、死に神はほとんどの死に係わっている。

生から死への移行は、駅の改札をくぐるようなものだ。

死に神はかの人からいのちを与えられる。

死に神は与えられたいのちを親類縁者もろもろに分けて配り、改札へと促す。
いのちの破片が改札切符だ。

かの人はいない世界へ、生者は汽車に乗って旅立つのだ。

十月二十三日（火）

そういえば、「死神くん」という漫画が昔あつたな、と思い出す。
内容はまるで覚えていないが、いい話だったように記憶している。
だからといって、マンガ喫茶に行くつもりはない。
あそこは心がとつても荒む。
かなり死にたくなる。

十月二十四日（水）

クラムボンの「シカゴ」の歌詞に出てくる、
みるみるふくれる真つ黒なあいつと、
みるみるしほむ真つ白なあいつ。

彼らは死に神に似た存在なのだと私は思う。
夢の中へお帰りなさい！

十月二十五日（木）

今月は思いつき死に神のことを書き殴った。

おかげで、なにか憑き物が落ちたような気がする。

それに、あの非常階段のところに行けばいつでも会える。

でも、当分行くことはないだろう。

十月二十六日（金）

階段の踊り場で、真剣な顔をして鼻毛を抜き続けている男がいた。
気持ちは分かる。

十月二十七日（土）

がらがら音を立てて大量のトイレットペーパーを浪費する人が私は許せない。
しかし、顔が見えないのが悔しい。
見えたらもつと悔しくなるんだらうけど。

十月二十八日（日）

広辞苑によれば、「ぽっくり」の第一義は「物が脆く折れたり、壊れたりするさま」とある。

私はそんな意味で「ぽっくり」を使ったことがない。

きつと、「ぽきつ」の元が「ぽっくり」なのだろう。

でも「ぽきつと死ぬ」って、なんだか嫌だなあ。

十月二十九日（月）

自分の死のことばかり考えがちだが、親だつて死ぬのだ。

以前にも書いたが、私は人の死は望まない。

しかし、親に限つてはそうも言つてはられない。

親を失うと私の心はどうなるのか、今の私にはまるで分からないのが怖い。死に神はうまくやつてくれるだろうか？

十月三十日（火）

荒木経惟は棺の中の妻の写真を撮り続けた。

あれは写真を撮っていたのではなく、死んだ妻と会話していたのだと思う。過激な写真とは裏腹に、彼は非常にシャイな人だと聞く。

カメラのレンズを通してはじめて自分になれる、そんな人なのだろう。文字を通してしか自分になれない私は、一体どうすればいいのだろうか？

十月三十一日（水）

さようなら、何もなかった、私の十月！